

# 16世紀から17世紀における英国の子供の装い

松 尾 量 子

## Children's Costumes in England During the Sixteenth and Seventeenth Centuries

Ryoko MATSUO

### 要旨

子供の衣服は成人のものとは異なり、本質的に着せられる衣服であるという特殊性をもつ。アリエスは、近代的な意味においての子供観の歴史を検証する上で、子供の衣服を子供に生じた変化を証言する貴重な証拠として取り扱っている。16世紀の英国は、視覚性が重んじられ、身分や地位に応じた装いをすることが要求され、年齢もまたそのひとつの要素として意識されることになり、子供を子供として区別する衣服が誕生してくるのである。最初に男児が成人男子と区別され、続いて女児が区別されるようになり、17世紀には、大人から子供を区別する記号的作用を持つ背中の飾りリボンが成立することになる。子供のための服飾品がいかに展開したかをたどることによって、子供服において大人の衣服の模倣期とされる16-17世紀を考察する手がかりとしたい。

### はじめに

子供の衣服が、成人のものとは大きく異なる点は、子供（特に幼児）は自分の意志において衣服を身につけるのではないということである。子供服は本質的に着せられる衣服であるという特殊性をもち、「親の感情や価値観、また親をはじめとする大人たちが形成する社会の意識の反映であり、しばしば実験場としての様相を呈したのである」<sup>1)</sup>。アリエスは、『<子供>の誕生』において、近代的な意味においての子供観の歴史を様々な角度から検証する上で、子供の衣服を「外見上の体裁ならびに服装がきわめて重大な意味を持っていた社会にあって、子供にかんして生じた変化を証言している」<sup>2)</sup>ものとして扱っている。そして「十六

世紀・十七世紀の社会の上層階級では、子供や幼児に、大人たちと区別する特別の衣裳を与えるまでになるのである」と述べている<sup>3)</sup>。

本来、子供服は成人の衣服に比べてはるかに現物資料が少なく、アリエスも述べているように17世紀以前は絵画資料も限られている。16世紀から17世紀にかけての子供の装いは、大人の衣服のミニチュア版という扱いをなされることが多く、ブルックは、「16世紀の不幸な子供たちは、その両親の正確な複製としての衣服をまもっていた」と述べている<sup>4)</sup>。しかし、16世紀前半には、すでに絵画資料から見て、少なくとも男児においては子供の年齢に応じて衣服の形態が少しずつ異なっていたことが報告されている<sup>5)</sup>。これらは、子供のためにだけデザインされた衣服ではなかったが、男児は明らかに成人男子と異なる衣服を身につけていたことは事実である。

16世紀は視覚性が重んじられた時代であり、人々はその身分や職業に応じた装いをすることを求められた。この時期に、男子服において、年齢による衣服の違いが誕生する。すなわち、成人男子と男児と老人は、着用している衣服によって見分けられるようになったのである<sup>6)</sup>。そして、16世紀に着用された服飾品のいくつかは、17世紀以降、子供を示す記号として用いられる服飾品へと展開することになるのである。

### 1.

16世紀において生まれたばかりの子供は、包帯状の布地で巻かれた。これは近代以前にいかにか子供が虐待されていたかを示すために引き合いに出されるスワドリング(swaddling)である。スワドリ



図1 「王妃と王子」1610-15年 大英博物館



図2 「アラベラ・スチュアートの肖像」  
作者不詳 1577年 ハードウィック・ホール

ングの習慣は、ローマ時代にさかのぼるとされており、19世紀まで行われたが、地域や身分によって、その実態はかなり異なっていたようである<sup>7</sup>。16世紀においても、貴族階級の場合には、実際には一日中巻きっぱなしというのではなかったようで<sup>8</sup>、スワドリングの期間も徐々に短縮され、生後数週間であった。

スワドリングの時期を通過した幼児は、男女の別なく丈の長いローブを着用することになる。この幼児用のローブは袖が付かないことが多く、アームホールには装飾としてウイングが付けられており、背中には、歩行を助けるためのリーディング・ストリングスが縫い付けられていた。図1に見られるように、リーディング・ストリングスは子供の背後で大人が引っ張ることで歩行を助けたり、誘導するためのものである。1617年のレディ・アン・クリフォードの日記には、3歳の娘のリーディング・ストリングスを切り取ったという記述が見られる<sup>9</sup>。3歳という年齢になると当然の

ことながら、子供は歩行を助けたり誘導したりするための紐を必要としなくなるからである。

3歳頃から、男児と女児では衣服に大きな違いが生じてくる。今日ハードウィック・ホールに残されているアラベラ・スチュアートの肖像画は、2歳にもならないにも関わらず、成人女性と同じ装いをして描かれている(図2)。画家の名前は伝えられていないが、作画時期は1577年とされている。この肖像画よりも時代はさかのぼるが、1536年にレディ・エリザベス(後のエリザベスI世)の養育係となったレディ・ブライアンが、母の処刑によって、嫡出子としての身分を失ったエリザベスのおかれている現状を訴える手紙の中で、幼いエリザベスが、少なくとも国王の娘としての身分にふさわしい装いをするために必要な「ガウンもカートルもベチコートもスモック用のリネンもカーチーフもナイトガウンもコルセットもハンカチーフも袖も糊付けしたボディもマフもビギンも持っていない」と続けている<sup>10</sup>。3歳の幼女に

必要とされた服飾品は、幼児の必需品とされたビッグン (bigginsコイフに似た乳幼児のための被り物) を除くと当時の貴婦人が必要としたものと同じであった。

翻って男児は、3歳の時点では、まだ大人とはまったく異なった衣服を身に着けていた。16世紀の成人男子の基本的な衣服構成においては、ホーズ (hose) <sup>11</sup>が必要不可欠な服飾品であったが、男児が最初にホーズを身につける年齢は、7歳頃であったとされる。この年齢は、今日では「学齢期に達する」年頃である。男児はホーズを身に付ける年齢に達するまでは、丈の長いローブ形式のガウンを着用していた。男児のガウンは、着用者の年齢が上がるにつれて、上半身は成人男子のダブルレットに近い形のものになってゆく。1600年頃に描かれたとされるレスター伯ロバート・シドニーの家族の肖像画(図3)では、レスター伯爵夫人とその子供たちの姿をみることができる。6人の子供たちのうち、画面の中央に描かれている少年と画面の左端の末子が男児である。末子は胸当てのついたエプロンを付けて描かれていることからおそらくは1歳に達していないと思われる<sup>12</sup>。長男は、丈の長い衣服を身につけているが、画面の右端に描かれている同じ年頃と思われる姉妹の衣服との差は歴然としている。長男の上半身はすでに、成人男子のダブルレットに近いものになっているのである。腰には剣を釣り下げており、男子で

あることが視覚的に示されている。少年のガウンは、同年齢の子供たちの中から男子であることを識別させるものであり、同時に成人男子の衣服との間にもはっきりとした違いを示すものである。

アリエスは、このような男児のガウンについて「十六世紀中葉から顕著になる男児の服装のこのような女性化」として「女性の服装をさせる慣習」と述べている<sup>13</sup>。アリエスは特に、4、5歳以前の男児が女兒と区別がつかないことをさしているのであるが、アラベラ・スチュアートの肖像画(図2)やレディ・アン・クリフォードの日記<sup>14</sup>は、女兒が2、3歳という非常に幼い時期からからコルセットを身につけていたという事実を裏付けている。即ち、幼児期の非常に早い時点から男児の服と女兒の服には違いがあったことを示している。男女は最初から区別されていたのであり、幼い男児が着用したのは、独自の男児服なのである。アリエスは子供服には「裾長の服装が生き残るといふ、一種のアルカイズムがみられる」と述べており、17世紀以降、男児に女兒の服を着せるといふ意識が働くようになったという解釈をしている<sup>15</sup>。



図3 「レスター伯 ロバート・シドニーの家族」  
マーカス・ゲイラーツ筆 1600年頃 ペンズハースト館



図4 「サー・ウォルター・ローリーとその長男」  
作者不詳 1602年  
ナショナル・ポर्टレイト・ギャラリー

アリエスは、エロアールによる日誌を資料に用いているが、ブタツツイによれば、16-17世紀のフランス宮廷の服飾そのものが、女性的な方向に向いていたと指摘されている<sup>16</sup>。

男児は7歳頃にスカート形式のガウンを卒業し、成人と同じように脚衣を身に着けるようになる。図4は、1602年に描かれたサー・ウォルター・ローリーとその息子(8歳)の肖像画である。少年が着用しているのは非常にたっぷりとしたヴェネツィアンズと呼ばれたブリーチズ(breeches)である。男児が初めて大人の衣服の象徴としてこのような衣服を身に付けるということは、非常に重要な特別な出来事であったようで、しばしばbreechingと表現されている。1679年に6歳でブリーチズを身につけたフランクという少年の祖母がその父親にあてて詳細に書き送っている手紙が残されている。その中でフランクはブリーチズを着用することで今までよりずっと「背が高く立派に見える」と書かれている<sup>17</sup>。1635年に描かれたファン・アイクによる2枚の『チャールズI世の子供たち』という絵画は、非常に興味深い。2枚ともチャールズI世の3人の子供を描いたものである。5歳の王太子チャールズ(後のチャールズII世)、3歳のメアリ王女、1歳のジェイムズ王子(後のジェイムズI世)は、最初に描かれた肖像画では、3人ともローブを身につけている。しかし、父である国王からチャールズについては、ブ

リーチズを身につける年齢に達しているという求めがあり、2枚目の肖像画では、大人と同じスタイルで描かれているのである。男児が大人の衣服を身につける(bleeching)明確な年齢は規定されていなかったようで、アリエスが資料として取り上げたエロアールの日記によると、王太子ルイ(後のルイXIII世)は、7歳8ヶ月でようやくブリーチズを着用している<sup>18</sup>。

## 2.

16世紀の服飾品のなかには、これ以後、子供を表す記号として着用されることになるものがある。その一つは、ハンギング・スリーブ(hanging sleeves)である。これは、17世紀後半以降、子供の衣服の背中に長く垂らしてつけられることになるリボンへと展開してゆく。ハンギング・スリーブは、13世紀以来、男女を問わず服飾史上に繰り返し登場してくる。16世紀になると、完全に装飾的効果としての見せ掛けのハンギング・スリーブが登場している。図5は16世紀の版画で、遊んでいる子供たちの姿が描かれている。彼らは皆、男児で、ガウンの長いハンギング・スリーブをたなびかせて遊んでいるのであるが、中にはハンギング・スリーブが遊びのためには邪魔な存在であるかのように背中で結んでいる子供を見ることができる。この時点ではまだハンギング・スリーブは必ずしも子供の衣服に不可欠なも



図5 「遊んでいる少年たち」 シャン・ルクレルク

のではなく、ガウンにはハンギング・スリーブの付いているもの、いないものがある。1592年に描かれたエリザベス1世の『ディッチリィ』肖像画では、地面に達する非常に巨大なハンギング・スリーブを見ることができる。16世紀末には流行の先端にあったこのようなハンギング・スリーブは、17世紀には、子供を示す記号になってゆく。1625年頃に描かれたとされる第3代サー・トマス・ルーシーとその家族の肖像画には、7人の子供の姿が描かれている。そのうち母の隣で果物の皿をもっている少女と父親に話しかけている少女は、10代前半の年齢であると思われるが、長いハンギング・スリーブを付けている。また画面の前面に描かれている2人の子供たちもハンギング・スリーブをつけていることがわかる(図6)。

1663年7月30日のサミュエル・ビーブスの日記には、ある少女が1, 2ヶ月前にはハンギング・スリーブを長く垂らして「たいそう小さな子供だったのだが、お嫁にいつてしまっていた」という記述がある<sup>19)</sup>。この少女の結婚は当時の基準からしても幼婚であったため、ハンギング・スリーブが少なくとも、この時期には少女が適齢期に達したか否かを区別する記号になっていたことを示し



図6 「ルーシー家の人々」(部分)  
作者不詳 1625年頃 チャールコート

ていると考えられる。

ハンギング・スリーブは、17世紀以降子供を示す記号として、背中に垂らすリボンへと展開する。アリエスは、ハンギング・スリーブから派生したとされる飾りリボンと実用的なリーディング・ストリングスを明確に分けている<sup>20)</sup>が、16世紀の場合には、ハンギング・スリーブが時にはリーディング・ストリングスの役割をも果たしていたという解釈がなされている<sup>21)</sup>。はっきりと飾りリボンが登場してくる以前においては、これらは未分化であったとも考えられる。飾りリボンは、子供であることを示す記号として以外は実用性をもたない紐であったが、それを付けさせることで子供をコントロールしようとする大人の心理がどこかに働いていたのではなかろうか。

### 3.

17世紀になると女兒や少女の衣服は、成人女性のものよりは少し前の時代の流行を反映したものになる。1577年のアラベラ・スチュアートの肖像画(図2)において、幼いアラベラが手に持っている人形は当時の最新流行の服を着ており、アラベラの装いとの間には2, 3年の時間差が見られることが指摘されている<sup>22)</sup>。1600年頃に描かれたシドニー家の肖像画(図3)では、年長の2人の少女たちとその母親の衣服を比べてみると、母親の着用しているボディスは、17世紀のファッションを予兆するようにウエストラインが自然な位置に戻ってきているのに対して、少女たちは相変わらずウエストラインがぐっと前に下がったボディスとスカートを身に着けている。この場合母親と少女たちの衣服における時間的な差は10年前後ということになるだろう。

さらに図6に注目すると、少女たちの衣服と母親の衣服の間には大きな違いがあることがわかる。母親のボディスとスカートは1620年代の女子服の傾向を反映して、光沢のある黒いシルク地で作られており、16世紀の服飾のもっていた堅さはみられない。少女たちの方は、16世紀に特徴的であった重厚な紋織地のボディスとスカートを着けており、非常に深いネックラインと高いウエストライン、肘の上で膨らんだ袖、長いハンギング・スリーブによって、過去のファッションの傾向が色濃いものである。アリエスは「最初の子供服は、

一世紀前には大人たちのだれもが着ていたが、それ以後には子供だけしか着用しないことになる衣裳だったのである」と述べ、「子供たちのために服装を一式考案するなど、明らかに不可能であった。とはいえ服装によって一種可視的な仕方の子供たちを分離する必要性が感じ取られていた。それゆえ、子供たちのために、一部の身分の人びとに伝統的に保存されているが、もはや着用されなくなった服装が選ばれたのである」と続けている<sup>23</sup>。

14世紀にフランスやドイツでは、子供に流行の丈の短い上着を着せないようにするという意識が働いた。これは、単に子供に丈の長い衣服を着せておきたいという心理が働いていたのか、流行にかぶれることをおそれたのかを区別することはできない。ただ子供には大人とは異なる服装をさせようという意識が存在したことだけは確かである。17世紀の後半には、衣服の流行の傾向は、16世紀的な面影を脱してゆく。17世紀の末になると公式の場では年長の少女の場合、髪型はフォンタンジュに結い上げられていたが、背中には子供であることを示すリボンが垂れていたのである。アリソン・リュリーは、衣服は年齢によって丈が長くなるという原則から外れる例として、乳児服や洗礼服をあげているが、彼女の指摘ではこれらの衣服は子供が無事に成人する確率の非常に低かった時代において、「一種の身につけるおまじない」の役割を果たしていたというのである<sup>24</sup>。子供を示す背中のリボンもまた、アリエスのいうような前の時代のハンギング・スリーブの名残であるとともに、このリボンの長さが短く見えるほどに無事に成長してほしいという大人たちの無意識の願望がこめられていたのかもしれない。子供に丈の長い衣服を着せるという習慣は、今日においても誕生まもない乳児のベビードレスという形で残っている。

#### おわりに

レディ・エリザベスの養育係であったレディ・ブライアンは1536年に手紙の中で食事の時にテーブルの上に並ぶ様々な食物にエリザベスが手を伸ばさないようにするのは至難の業であり、このままではエリザベスの健康に責任がもてないと述べている。この手紙は、16世紀の前半には、3歳の

女兒は幼いながらに大人と同じような衣服をまとい、大人のように振る舞うことが求められていたことを示しているが、同時にそのようなことは、子供のためにはかならずしもよくないという意識がすでに存在していたことがわかる。レディ・ブライアンの手紙には「レディ・エリザベスくらいの年齢のお子様がこのような規則を守ることはまだ無理です」<sup>25</sup>というくだりがあり、すでに16世紀の中葉において、子供には子供のための扱いを求めるという意識が存在したことを示している。アリエスがいみじくも述べたように子供は意識的に記録を残さないし、子供服もまた、16世紀、17世紀のものは、僅かに残されている洗礼用のローブを除けば現存していない。会計記録などに残されているのは、裕福な階級に限られる。今日よりもはるかに成人する確率が低く、また若くして没することが多かった時代においては、子供である期間は非常に短いものであった。特に女子の場合は、ピープスの日記の例を出すまでもなく、財産のために非常に幼くして結婚することが多かったのである。しかし、16世紀から17世紀にかけての時代に子供が子供であることを示す服飾品は存在したのであり、その背景には、レディ・ブライアンの手紙に見られるような非常に素朴なレベルであるにしても、子供へのまなざしが存在していた。

16世紀の服飾品の中で後に子供を表す記号に変化したもう一つのもは、エプロンである。エプロンは、16世紀においては、まだ必ずしも今日のような家事労働に直結するものではなく、おしゃれな流行品として貴婦人たちに着用されることがあった。現存する肖像画にみられる幼児は、非常に薄い透けるようなエプロンを着けて描かれており、素材の薄さや、高価なものであることが容易に想像できることから、衣服の汚れ防止という機能性のために着用されたとは考えられない。女兒の場合、3歳を過ぎたころから着用される衣服は大人のものとはほとんど違いないものであった。図3では、4人の少女のうち、年少の二人がエプロンを付けて描かれており、そのために彼女たち2人は、非常に若い少女であることが示されている。一般に4、5歳までは男女を問わずにエプロンが付けられたようである。時代が下がるに連れて、エプロンは子供服にとって欠くことのできない服飾品になり、それぞれの時代の流行との関わりの

中で今世紀まで連綿とつづくことになる。エプロンは当然のことながら、汚れ防止という実用的働きをするもので、労働者階級の子供にとっては、必要な服飾の一部であった。16世紀に幼い子供たちに着用されるようになったエプロンが、20世紀まで子供服にとって重要な位置にあったという事実は、子供服に求められた感情を解く鍵になるのではないかと推察する。このような子供のエプロンについては、稿を改めて論じたい。

## 註

- 1 能澤慧子「子供服の歩みー長かった不在の時代ー」装苑アイNo.12 文化学園ファッション情報センター、1993年7月、p.19
- 2 フィリップ・アリエス、杉山光信・杉山恵美子訳『<子供>の誕生』みすず書房 1981年 p.123
- 3 Ibid.,p.123
- 4 Iris Brooke: English Costume in the Age of Elizabeth, A.&C.Black,London,p.22
- 5 高橋裕子「子供から大人へー美術に見る境界の移動ー」化粧文化No.25ポーラ文化研究所 1991年11月、p.21  
またPhillis Cunnington & Anne Buck : Children's Costume in England 1300-1900, Adam & Charles Black , London , 1965 では16世紀にすでに男児服においては、年齢の経過に従って微妙にガウンの形が変化している事実が述べられている。
- 6 ルネサンス期以降、成人男子の衣服は、上着と脚衣という組み合わせが基本になってゆくの、ガウン形式の衣服は地位や身分の高さ、そして年齢の高さを示す衣服となる。肖像画においては、この傾向が顕著にみられる。
- 7 スワドリングの期間については、諸説があるが、16世紀の英国では生後数週間行われていたとされている。1628年にフランス生まれのダービー伯爵夫人シャルロットは、英国でのスワドリングを「嘆かわしい」と述べている。(Phillis Cunnington & Anne Buck : Children' s Costume in England 1300-1900, Adam & Charles Black , London , 1965 ,p68)
- 8 Phillis Cunnington & Anne Buck : Children's Costume in England 1300-1900, Adam & Charles Black , London , 1965 , p.35
- 9 Jane Ashelford : The Art of Dress, Harry N.Abrams, London ,1996, p.275  
P. Cunnington & A. Buck :op. cit.,p.90
- 10 Janet Arnold : Queen Elizabeth' s Wardrobe Unlock'd ,Maney, London,1988, p.3
- 11 この場合hoseは脚衣を総称する言葉として用いる。16世紀を通じて男性の脚衣は非常に多様なスタイルが登場しており、名称も様々であるが、大きく分けると比較的短い丈のhoseと膝丈のbreechesに分けることができる。今回は脚衣の細かい検討を行うわけではないので、便宜上、男子の着用する半ズボン状の脚衣を意味する言葉として16世紀の中葉までの場合はhoseをそして16世紀後半から17世紀についてはbreechesを用いる。  
Cunningtonらの研究においては16世紀を通じて1660年頃まで「hoseという語は、常に脚衣 (leg wear) を意味し、少女を除いてストッキングを意味するのではなかった」と述べられている。(P. Cunnington & A. Buck: op. cit., p.45)
- 12 よだれかけのついたエプロンは生後6ヶ月から1歳まで着用された (P. Cunnington & A. Buck : op. cit., p.37)
- 13 アリエス : op. cit., p.57
- 14 レディ・アン・クリフォードの1617年4月28日の日記には「はじめて子供が一對の鯨骨の入ったボディスを身に付けた」と記されている。この時の子供の年齢は3歳である。同年5月1日にはリーディング・ストリングスを切ったという記述がある。(Jane Ashelford : op. cit., p.275)
- 15 アリエス : op. cit., p.58
- 16 グラツイエッタ・ブタツツイ、石川弘子訳『ラ・モード』モード学園出版局、1993年、p.218
- 17 P. Cunnington & A. Buck : op. cit., p.72
- 18 アリエス : op.cit., p.53
- 19 白田昭訳『サミュエル・ピープスの日記』第4巻 国文社、1989年、p.311
- 20 アリエス : op. cit., p.54
- 21 P. Cunnington & A. Buck : op. cit., p.70、 p .89  
Jane Ashelford : op. cit., p.274
- 22 Jane Ashelford : op. cit., p.275
- 23 アリエス : op. cit., p.56
- 24 アリソン・リュリー、木幡和枝訳『衣服の

記号論』文化出版局、1987年、p.56

25 J.E.ニール、大野真弓他訳『エリザベス女王』

1、みすず書房、1979年、p.7

#### 図版出展

Phillis Cunnington & Anne Buck : Children' s  
Costume in England 1300-1900, Adam & Charles Black  
, London , 1965 (図1)

Jane Ashelford : The Art of Dress, Harry N. Abrams,  
London ,1996 (図2、図6)

Ed. James Laver : Le Costume des Tudors a Louis X  
III, Paris, 1950 (図3)

Elizabeth Ewing : History of Children' s Costume,  
B.T.Batsford Ltd.,London,1977 (図4、図5)